



第15号

令和5年1月10日発行

社会との接点 次への基点

地域とつながりを深める新潟少年学院 野菜や陶器の即売会

長岡には進取の気風が漂う。時代の先を読み、人づくりへの投資を進める街だからでしょうか。街の中心になつていくのが、駅のほど近くにある巨大な自由空間「アオーレ長岡」です。市民の協働と交流の拠点になつていきます。

この一角のナカドマ（屋根付き広場）で、11月17日に新潟少年学院（伊藤院長）の少年たちが、心を込めて作った陶芸や木工製品、新鮮な野菜が並びました。職業製品のマルシェです。職業製品づくりから販売までの流れを、市民に見守られながら実践的に学ぶ場になりました。



木工製品や野菜を手にとる人たち

新潟少年学院では、地域との連携を学習する職業指導が取り入れられています。マルシェのきっかけは、4月にありました。伊藤院長が磯田市長を尊敬した際に、ナカドマの話になりトップ合意で決まったそうです。最初のマルシェは7月にありました。

ナカドマは街に開かれた構造になつていきます。出店準備が整うとすぐ、市民らが訪れていました。敷地内農地で朝採りしたダイコンやサツマイモが並びました。出店前に置かれた看板には大きな文字が躍っています。

「製品企画科アグリコース フレッシュ 最強!」。湯飲みなどの陶芸品も自作です。福島陶芸家に月1回指導を受けた本格派なのです。まな板などの木工製品も人気を集めていました。最後の製品になりました。昨年、木工科はなくなり、新しくパソコンなどを学ぶICT技術科ができたからです。



「アオーレ長岡」と一体となっている市役所から、市教育長と子ども未来部長らがエールを送りに足を運んでくれました。結び付きの強さが距離の近さになつていくのを物語っています。

「一生懸命の野菜」「愛情をかけてつくられたのですね」「茶碗がよくできている」「まな板もきれいだ」。訪れた人たちの評判は上々です。「いろんな事情があつて少年院に入ったのだろうけど、ぜひ更生してほしい」と静かに語ってくれた人もいました。新潟少年学院では「この日の様子を少年たちにフィードバックしたい」と話していましたが、市民の立ち直りへの期待の言葉は、少年たちと出会うでしょう。「アオーレ」は長岡の言葉で「会いましょう」なのです。社会との接点は、次のステップの起点になります。

催しは、新潟少年学院と「アオーレ長岡」を運営するNPO法人「ながおか未来創造ネットワーク」が何度も相談に相談を重ねて実現しました。NPO法人の担当者には、ずっと考えていたことがありました。購入してくれた人の声を少年たちにどう届けられればいいのか。「会えないけど、購入者の心とつながる」。そう思うようになったといえます。

米百俵故事が息づく「人づくりの長岡」。新しいかたちの立ち直り支援が始まっています。

「開いて」招く 新景

周囲に横たわる「怖い」・・・ぬぐう

新潟少年学院は、素顔の自然に囲まれています。目の前には野面が広がっています。フクロウも近くで見守ってくれています。野山が思慮深く空間を包み込んでいます。北側に野球場があり、それほど遠くないところに市立図書館があります。

落ち着いたたたずまいには理由があります。



裏手に広がる農園

市立図書館は、新潟少年学院がつながらを着実に展開したところ。100冊、200冊の本の団体貸し出しの恩返しに、少年たちが返却本の整理をする作業に発展しました。読書感想文は、今年度から本格的なビブリオバトルに進展しました。公式ルールでの白熱戦です。審査員を市立図書館長や近隣の校長先生が務めます。2回目は12月2日。知的興奮はさることながら、「チャンプ本」獲得までのコミュニケーションが成果となるようです。

長岡出身のいとこ同土ユニット「ひなた」のコンサートは11月25日に体育館で開かれました。夢や成長忘れかけていた気持ちを思い出させてくれる歌詞の世界を持っています。「母に向けての曲は、聴いて泣きそうになりました」「ひなたさんの曲のように、自分も意味があるものだ」と思っていることにしよう。心にしみた感想がありました。

「場」を通過しながら、新しい景色を見ながら、少年たちは新しい学びを手に入れるはずだ。



「ひなた」の演奏に聴き入る



冬には市営スキー場で滑る

周りの目はいつも優しいわけではありません。いまや児童相談所や幼稚園も「迷惑施設」のように感じられる人もいます。各地で建設反対の例があります。立ち直りを支援する施設も同じような状況にあるといえます。これはNMBY (Not In My Back Yard) と呼ばれます。必要性は認めるけれど自分の裏庭には嫌だ、という考え方です。

伊藤院長の少年院観にまずあるのは、周りから「怖い」と見られているということ。現実を直視したものです。根強い先入観を拭い去るために、「開かれた」少年院にすることから始めているのです。「怖い」の解消は、地元との触れ合いと並走しています。先を見据えての取組は、あつちにもこつちにも通じます。きつと染み付いた「怖い」は「お隣さん感情」に転化するはずだ。「前に踏み出す」ことが立体的に行われています。